

---

# 淡イ早春ノモノガタリ

intruseSR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

淡伊早春ノモノガタリ

### 【Nコード】

N5557J

### 【作者名】

intruseSR

### 【あらすじ】

春休み、僕は砂浜で一人座っていた。何事もなく、平凡に夕日を眺めていた。  
そう、彼女に出会うまでは。

海岸沿いにある町に住む僕は、砂浜から夕日を眺めることが好きだった。本当に好きだった。だからあの日も僕は砂浜に座っていた。それから始まった熱烈な、だけれども淡く消えてしまいそうな一つの物語があるとは知らずに。

その日僕はいつも通り夕日を眺めていた。いつもと変わらない夕日を、いつも通り眺めていた。だけどいつもと違ったのは、いつもはいるはずのない人がいたからだ。

「こんばんわ。夕日が綺麗ですね。」  
突然女の人に声をかけられた。

カノジョ ハイッタイ ナニモノ ダロウカ？

年は同じくらい。普通の、いやかなり可愛い女の子だった。しかし、なにか違和感があった。

マルデオナジセイブツデハナイカノヨウニ。

「すみません、突然話しかけちゃって。この辺の………中学  
生ですか？」

「うん。四月から中三。」

「あ、同い年です。」  
話を聞くと、彼女は最近ここに引っ越してきたらしい。今は春休みだから、四月から僕の学校に転入してくる事になっていると言う。

「あの、いつもここで夕日を眺めてるんですか？」

「え………まあ、うん。なんで？」

「いやあ昨日も居たよ。うん、居たよ。」

そんなお互いを探り合うような会話を続けているうちに真っ暗になつてしまった。

「もう遅いから、僕は帰るよ。」

「あの……明日も来ていいですか？」

「うん、もちろん。」

「ありがとうございます。さよなら。」

「じゃあね。」

そう言つて僕は砂浜を後にした。

僕はこの日、ただ一人の女の子と出会つただけである。本当にそれだけだった。でもこの出会いは、運命とはちよつと違つけれど、強いて言うならひとつの試練だったのかもしれない。

次の日の夕暮れ、再び彼女と会つた。

やはりナニカガオカシイ。

昨日も感じた不可解な雰囲気。でも、まだ慣れていない人だからと思つていた。

この日は、自分の得意なスポーツの話になつていた。

「僕は少し野球をやつていてね。」

「格好いいですね。ポジションは内野ですか？外野ですか？あるいはピッチャーだったりして。」

「ううん。応援。」

「ベンチとはまた違った位置づけですね。」

なぜだろう、遠まわしに罵倒されているようなのだが、全く毒がない。嫌味を言われている気が全くしない。

「君は？」

「私は、身体が弱いのであんまりやらないんです。」

「ふうん。」

意外だった。初めの印象は、元気そうな女の子だった。まあ、容姿だけで判断するほうが間違っていたのだろう。

「じゃあ私も帰ります。」

「うん、じゃあね。」

「さようなら。また明日。」

そんなこんなでいつのまにか、彼女と一緒に夕日を見ながら会話をすることが日課になっていた。別に僕が積極的になっっているわけではない。彼女は毎日来ている。仮に僕が休んで彼女は来ていたら、なんとなく申し訳ない気持ちになっってしまう。

それに、まんざらでもなかった。実際彼女はかなり可愛い。あんな子と毎日会えるとは、この上ない幸せと言ってもいいくらいに。

そして次第に僕は彼女に惹かれていった。いつの間にか好きになっていた。その頃には、彼女に対する違和感は全くなくなっていった。

そして、もう春休み最終日。彼女と二人きりの時間は、これで終わりになる。これからはきつと、二人だけで話せる機会などないだろう。だから決めた。

僕は四月七日、彼女に告白する。

「ねえ、なんかいつもより硬いけど、なんかあったの？」  
「なんにもしない彼女は言う。」

「なあ、伝えたいことがあるんだ！」

思いきって立ち上がった。

「僕は、僕は君の事が……」

その時だった。何か彼女に向かって飛んできた。

石だった。大きな石だった。

しかしその石は、彼女に当たることなく地面に落ちた。

「え……？」

オカシイ。ゼツタイニオカシイ。

三次元の座標上で、彼女の体と石の位置が重なった状態が数秒あった。でも、そんなことはありえない。そこに物がある限り、石と彼女が接触することはありえても、重なることなんて絶対にありえない。

ツマリソコニハナニモソンザイシテイナカッタ？

でも目の前に彼女がいるじゃないか……。

「おーい！なに一人砂浜で戯れているんだ？もしかして春休み中ずつとそんなことして過ごしてたのか？お前結構ルックス良いんだから彼女の一人や二人、作ればいいのに。」

石を投げたのは、僕の友達。でも、明らかに言動は不可解なものだった。

「だって……ほかにもこの子がいるじゃないか……」

ツマリ、アイツニハカノジョノコトガミエテイナイ？

ありえない。だって彼女は今だってここにいるじゃないか？

ボクニシカミエナイ。イシスラモアタラナイ。ツマリコレハ……

……ユウレイナノカ？

「気づいたみたいね。そう、私は幽霊。ここには本当は何も存在していないわ。」

「え……」  
「本当に幽霊なのか？」

「長い間あなたを騙していてごめんなさい。でも、ご飯を食べる為だもの。しかたないわ。」

「騙す？ご飯？全く意味が分からない。」

「知ってる？幽霊も食べ物食べなきゃ生きていけないのよ？」

「なにを……だよ。」

「それはね、『人を想う心』かな。」

そして僕は三年生になった。

「なあ、春休み何していた？」

「俺は彼女とデート三昧。お前は？」

「え……僕？ずっと家にいたと思う。」

新学期初日、なにやら女の転校生がやってきた。が、ちっとも興味は湧かなかった。

「ねえお父さん。」

「なんだ。」

「やっぱり幽霊と人間って、結ばれちゃいけないのかな？」

「当たり前だ。前にも言っただろ。」

「そう。」

私はどうしても納得できなかった。

「それにしてもあの時、よくあんなハツタリをかますことができた

わよね。」

彼女の瞳から落ちた水の粒は、誰かの心に届くはずもなく、淡く消えていった。

(後書き)

この小説で私を知った方ははじめまして。「オカルト研対決日記」  
を読んでいる方はお久しぶりです。

今回は短編を書いてみました。よくありそうな話ですが、一応自分  
で考えました。

恋愛物なんて初めて書いたので、あんまり面白くないかもしれませんが  
んが、読んでくれてありがとうございます。

感想待っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5557j/>

---

淡イ早春ノモノガタリ

2010年12月18日14時44分発行